様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１１１９４

研究課題名（和文）高齢者と子どものwell-being向上を導く簡便な世代間交流プログラムの共創

研究課題名（英文）Program for improving well-being of elderly and children

研究代表者
福岡　理英（Fukuoka, Rie）

島根大学・学術研究院医学・看護学系・助教

研究者番号：４０６２３８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：オンラインで実施できる世代間交流プログラムを作成し，その効果を検証することを目的とし，介護老人保健施設と幼児施設をオンライン中継でつなぎ，世代間交流を実施した。世代間交流プログラムは，①幼児たちのお遊戯・歌の発表会，②高齢者と幼児が一緒に手遊びを行う会を，各回一つずつ，間を空けて実施した。オンライン世代間交流の実施によって，高齢者の血圧低下・QOL項目の一部向上が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今回開発したオンライン世代間交流プログラムについて，一定の効果があることが明らかになった。簡便なプログラムであることで，継続した世代間交流が可能であると考える。また，遠隔地での世代間交流，感染流行時期においても実施可能であり，今後活用が見込まれる。

研究成果の概要（英文）：With the aim of creating an intergenerational exchange program that could be implemented online and verifying its effectiveness, an intergenerational exchange program was implemented by connecting a long-term care health facility for the elderly and a facility for young children via online relay. The intergenerational exchange program consisted of a play and song presentation by the infants, and a hand-playing session with the elderly and infants, one at a time, with a gap between each session. The online intergenerational exchange program resulted in a decrease in blood pressure and a partial improvement in quality of life items among the elderly.

研究分野：老年看護学

キーワード：高齢者　子ども　世代間交流　介護老人保健施設

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

国内外先進国の少子高齢化や人口の都市化は，単独世帯や核家族世帯に代表される家族形態の小規模化や世代の分離を招き，高齢者の孤立や子どもの人間関係構築力の低下等様々な弊害を助長している。この問題を解消する手段として世代間交流が各国で注目されており，内閣府（2018）も高齢者の社会参加の促進のためや子どもの情操教育のために世代間交流を奨励している。Kameietal.（2011,JpnJNursSci）は，世代間交流プログラムにより高齢者の心の健康の増進・抑うつ症状の減少を示した。我々も（福岡他,2015；糸井他,2012）世代間交流は高齢者と子どもの双方が互いに楽しみながら交流を図ることのできる手法であり，高齢者と子どもの心理的・身体的・社会的 well-being の向上に有効であることを示し，交流の重要性を示唆した。世代間交流の効果は，従来観察法や聞き取り調査等で評価されることが多く，近年高齢者への調査として，WHOQOL，主観的健康度（SUBI），GHQ-28，MMSE，GDS-15，PGC モラールスケール，老研式活動能力指標，歩行速度，握力，開眼片足立ち等を用いた調査が行われるようになった（糸井他,2012；藤原他,2006）。幼児の評価としては，観察法や職員への聞き取り調査，保護者へのアンケート調査等が行われている（林谷,2012）。しかし，未だ，科学的根拠に基づく有効性の検証は少ない。また，世代間交流の課題として，交流内容の企画，資金不足，職員の負担，人員不足等が挙げられ（築山他,2007；菅谷,2014；福岡他,2016），職員の負担と交流内容の選定の難しさが交流の障害となり，実施がわずかなことを明らかとなっているが，課題解決に向けての系統的提案も見当たらない。さらに，COVID-19 流行に伴い，世代間交流の実施が困難となっている。

２．研究の目的

オンラインで実施できる世代間交流プログラムを作成し，その効果を検証することを目的とした。

３．研究の方法

(1) デザイン

介入研究・自記式質問紙調査

(2) 対象

介入研究は，A 地方の介護老人保健施設に入所している高齢者，幼児施設に通う幼児（5～6 歳）を対象とした。高齢者は，世代間交流への参加と調査が行える（自記式アンケートに自己で記入できる）と施設の担当者が判断した者とした。自記式質問紙調査は，世代間交流に関わる介護老人保健施設の職員と幼児施設の職員を対象とした。

(3) 調査方法・内容

世代間交流は，介護老人保健施設と幼児施設をオンライン中継でつなぎ実施した。世代間交流プログラムは，オンライン中継を通しての実施が可能な①幼児たちのお遊戯・歌の発表会，②高齢者と幼児が一緒に手遊びを行う会を，各回一つずつ，間を空けて計 2 回実施した。

高齢者には，世代間交流実施前後で，自律神経，血圧，健康関連 QOL（SF8），老年期うつ病評価尺度（GDS15），認知機能検査（HDS-R），フェイススケールにより満足度・感情を測定した。幼児には，世代間交流実施前後で 4 段階のフェイススケールを用いて，幼児の感情と高齢者イメージを測定した。また，看護師・介護職等の世代間交流プログラムの実施者に対し，職員からみた高齢者・幼児・職員自身への効果，交流プログラムに関する調査（プログラムの時間・手間・内容等）を行った。調査期間は，2022 年 10 月～11 月であった。

(4) 分析方法

統計解析には IBM SPSS Statistics22.0 を使用した。有意差の検定には Wilcoxon signed-rank test 分析を用いた。有意水準 5%未満を有意とした。

(5) 倫理的配慮

対象者・対象者の代諾者に研究の目的や方法，手順，調査への参加は自由意思であること，無記名であり個人は特定されないこと，データは厳重に管理し研究目的以外で使用しないことについて説明し，同意書を得た。幼児については代諾者からの同意書とした。職員については，アンケート調査用紙の提出をもって同意を得た。島根大学看護研究倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号：346-2)。

４．研究成果

(1) 対象者の属性

高齢者は，6 名（男性 2 名，女性 4 名)，平均年齢 90.3±2.42 であった。幼児は，5～6 歳，1 回目 23 名，2 回目 17 名であった。職員は，男性 3 名，女性 19 名，平均年齢 47.0±12.31，勤務月数 174.0±135.2 であった。看護師 5 名，介護福祉士 4 名，OT2 名，保育士 9 名，その他 2 名（管理栄養士，保育助手）であった。

(2) 高齢者への効果

高齢者は介入前後で，血圧が有意に低下した（1 回目 DBP 73.7±7.12 vs 57.3±12.44,p=0.027，2 回目 SBP 129.2±23.44 vs 106.7±29.47，p=0.028)。SF8 の精神的サマリースコアにおいて有意に健康状態が向上した（2 回目 MCS 45.1±5.12 vs 52.0±5.58，p=0.043)。自律神経，GDS15，HDS-R，満足度・感情，精神的サマリースコア以外の SF8 の項目（PF・RP・BP・GH・VT・SF・RE・MH・PCS）に有意な差は見られなかった。

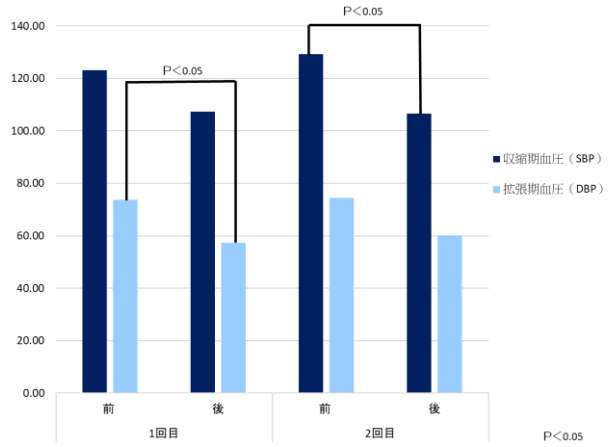

図 1. 世代間交流実施前後の血圧の変化

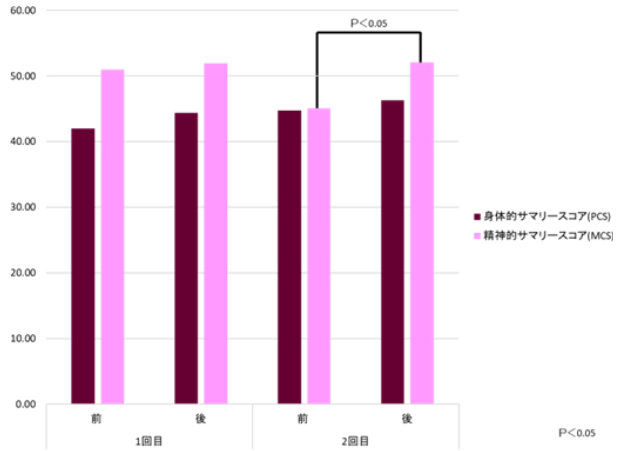

図 2. 世代間交流実施前後の健康関連 QOL（SF8）の変化

(3) 幼児への効果

幼児の感情と高齢者に対するイメージは，介入前後で有意な差はみられなかった。

(4) 職員の調査結果

①プログラムに関する調査

プログラムの内容は，とても良かった 38.1%，まぁ良かった 61.9%であった。実施時間は，長かった 42.9%，丁度よかった 52.4%，短かった 4.8%であった。手間が掛かったかは，とてもそう思う 9.5%，まぁそう思う 33.3%，あまりそう思わない 38.1%，全くそう思わない 19.0%であった。実施にあたる障壁感は，とてもある 0.0%，まぁある 26.3%，あまりない

52.6%，全くない 21.1%であった。今後も世代間交流を行いたいかは，とてもそう思う 71.4%，まぁそう思う 23.8%，あまりそう思わない 0.0%，とてもそう思わない 4.8%であった。継続できそうかは，とてもそう思う 11.1%，まぁそう思う 66.7%，あまりそう思わない 16.7%，とてもそう思わない 5.6%であった。

②職員が捉えた高齢者への効果

職員は高齢者への効果として，ほとんどの項目において「そう思う」と捉えていた。

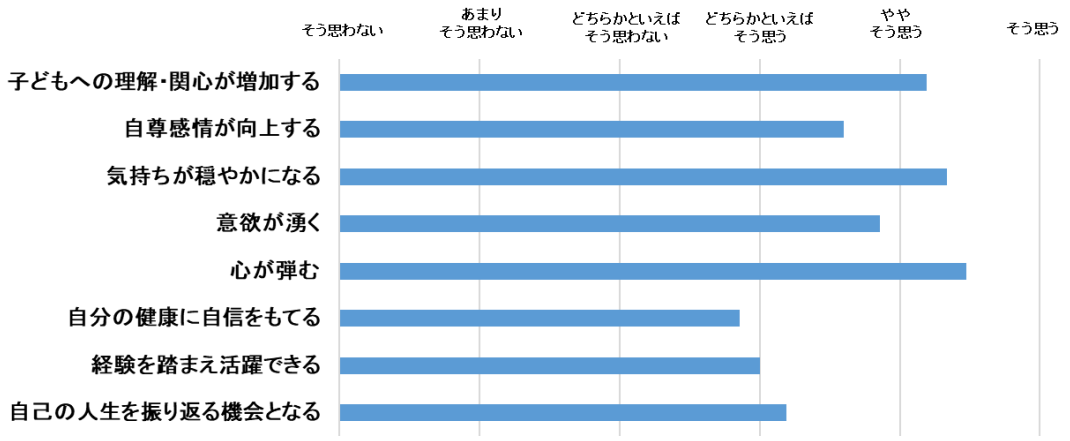

図 3. 職員が捉えた高齢者への効果

③職員が捉えた子どもへの効果

職員は子どもへの効果について，ほとんどの項目において「そう思う」と捉えていた。

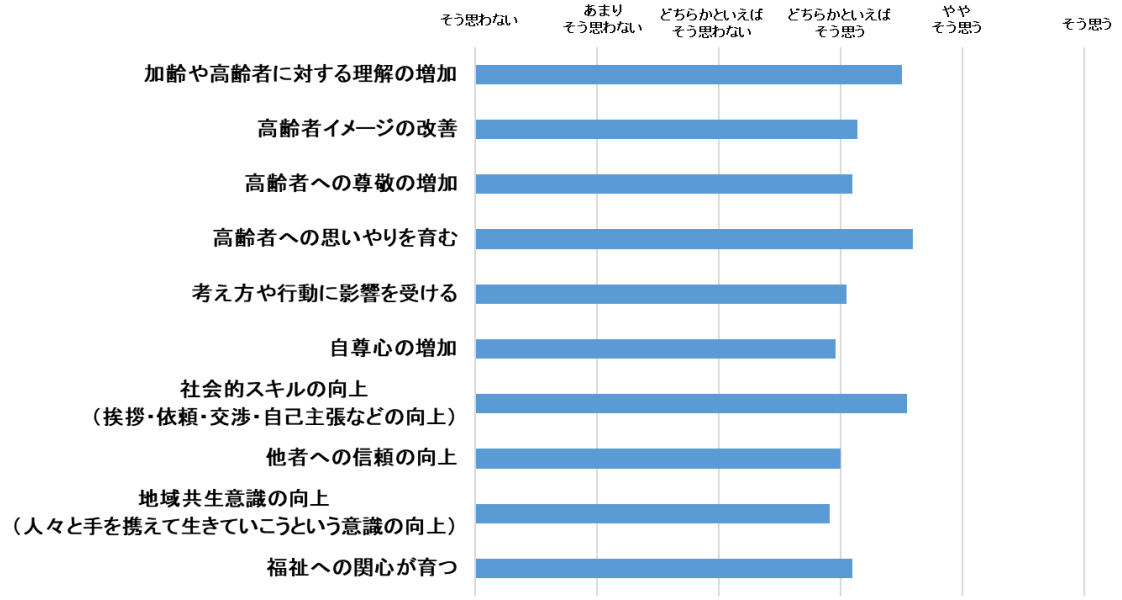

図 4. 職員が捉えた子どもへの効果

④職員への効果

職員は，すべての項目において「そう思う」と捉えていた。

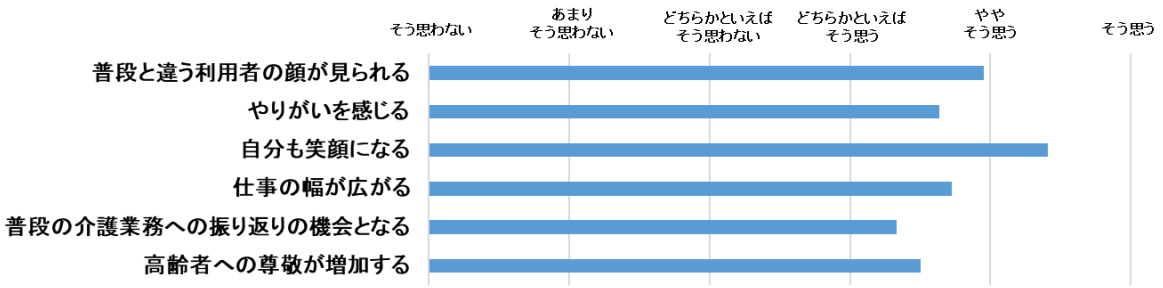

図 5. 職員への効果

⑤地域への波及効果

職員は，地域への波及効果について，すべての項目において「そう思う」と捉えていた。

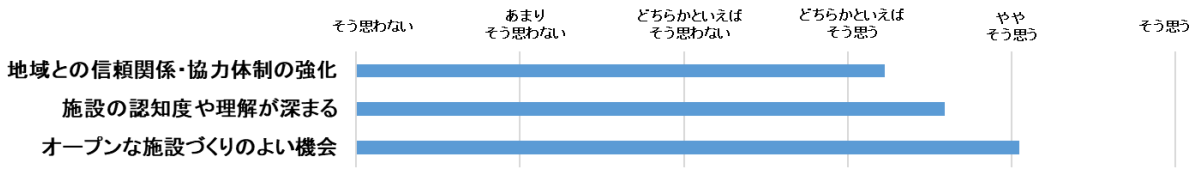

図 6. 地域への波及効果

オンライン世代間交流の実施によって，高齢者の血圧低下・QOL 項目の一部向上が認められた。世代間交流プログラム内容の検証，世代間交流効果の科学的検証を蓄積し，簡便で継続しやすい世代間交流プログラムの作成が必要であることが示唆された。

【引用文献】

糸井和佳,亀井智子,田高悦子他：地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果 ： 文献レビュー,日本地域看護学会誌,15(1),33-44,2012.

糸井 和佳，亀井 智子，田髙 悦子他：地域における高齢者と子どもの世代間交流観察スケールの開発 ： CIOS-E,CIOS-C の信頼性と妥当性の検討，日本地域看護学会誌,17(3)，14-22,2015.

Kamei,T.,Itoi,W.,Kajii,F.,Kawakami,C.,Hasegawa,M.,Sugimoto,T.(2011).Six month outcomes of an innovative weekly intergenerational day program with older adults and school-aged children in a Japanese urban community,Jpn J Nurs Sci,8,1,95-107.

菅谷 泰行：老人福祉施設における世代間交流に関する実態調査報告 ： 近畿 2 府 4 県でのアンケート結果の分析,介護福祉学,21(2),122-129,2014.

築山崇,黒澤祐介,草野篤子他：世代間交流の実態調査報告 ： 京都市・神戸市のアンケート調査より,福祉社会研究,7,123-129,2007.

林谷啓美,本庄美香：高齢者と子どもの日常交流に関する現状とあり方,園田学園女子大学論文集,46,69-87,2012.

福岡理英,原祥子,小野光美：複合施設で生活する高齢者における子どもとの交流の意味,島根大学医学部紀要,38,2015.

福岡理英,木村真司,小笹美子,榊原文:介護老人保健施設における世代間交流の実態,第75回日本公衆衛生学会総会,2016.

福岡理英,木村真司,原祥子,小笹美子:介護老人保健施設の高齢者と子どもの世代間交流における高齢者に対する効果,日本老年看護学会第22回学術集会,2017.

福岡理英,木村真司,赤井研樹: 介護老人保健施設における世代間交流の地域への波及効果と子どもへの効果,第37回日本看護科学学会学術集会,2017.

藤原佳典,西真理子,渡辺直紀他:都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム：“RE-PRINTS”の一年間の歩みと短期的効果，日本公衆衛生雑誌，56(9),702-714,2006.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Rie Fukuoka, Shinji Kimura
２．発表標題 Intergenerational exchange effects of different stages of child development
３．学会等名 the International Council of Nurses 2021 Congress（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	木島　庸貴 (Kijima Tunetaka) (10727233)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・講師 (15201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関